

手作り食品と市販品の併用状況

-揚物について-

○高橋 洋子(新潟大)、勝田 啓子(奈良女大)

目的： 現代の食生活を考察するにあたり、'家庭での手作りから市販品購入へ'という変化は、大きな要素と思われる。本発表では、揚物について、「家で揚げている状況」「市販品を食している状況」「食べたいと思う度合い」等を調査し、居住地や主婦の世代による差異などを検討することとした。

方法： 1996年12月(一部は翌年1月)に、アンケート調査を郵送で行った。対象は、新潟県内在住の大学生の母親(Nu)、同幼稚園児の母親(Nk)、東京都およびその通勤通学圏在住の大学生の母親(Tu)、同幼稚園児の母親(Tk)の4群で、回答者は4群合計951名(Nu=187、Nk=172、Tu=191、Tk=401)であった。

結果： 5つの形態の揚物の摂食頻度を、[食べない→0点～殆ど毎日→8点]と比例配分で点数化し、《「揚げる」という調理操作を家庭内で行うかどうか》に着目して、家で揚げる(すべて手作り、半調理品利用2形態)頻度点数をA、揚げてある市販品(オーブン・スター・電子レンジ用の冷凍食品、完成品)を食する頻度点数をBとして、各群を比較したところ、①A>0、B>0の家庭が、4群とも有効回答数の約90%を占めた。そのうち、A<Bの家庭は、4群とも約20%であった。②A=0、B>0の家庭は、Nu=0%、Tu=0%、Nk=2.4%、Tk=1.6%と、主婦世代間に差が見られた。③A>0、B=0の家庭は、Nu=4.9%、Nk=4.3%、Tu=11.5%、Tk=9.3%で、地域間に差が見られた。④A、Bとも、Nu>Tu、Nk>Tkで、地域差が認められた。揚物を食べたいと思う度合いについても、Nu>Tu、Nk>Tkという傾向が見られ、実際に食している頻度にも、地域差が表出していた。また、Aについては、Nu>Nk、Tu>Tkで、主婦世代間にも差が認められた。